

難波 収氏の逝去を悼む

小暮智一 (京都大学名誉教授)

難波 収氏は2013年5月7日にオランダ ユトレヒトの自宅で逝去された。5月3日に87歳の誕生日を迎えたばかりであった。彼の晩年はがんとの戦いであった。日本のMワクチンががんの効果があるとのことで数年前から治療とワクチン入手のために何回か帰国している。亡くなられる前の4月下旬にも娘さんの介護で帰国され、ある夕べ、私たちと一緒に食事をした。そのときは「来年もまた春の頃に来られるかな」など元気しておられたが、それからわずか2週間後に逝去されるとは思いもよらず、娘さんからの電話に絶句したのであった。

難波 収氏は1926年に岡山市に生まれた。軍国主義の時代とあって、中学2年生で陸軍幼年学校へ、それから陸軍航空士官学校へと進み、昭和20(1945)年に卒業した。少尉任官を目前に終戦となって念願の士官にはなれなかった。しかし、その年に卒業した陸士、海兵の卒業生には大学入学資格が与えられたので、彼は星に憧れをもって京大受験を決心し、宇宙物理学科に入学した。彼に言わせると「星の生徒」(陸士)から「星の学生」(宇宙物理)へと変身したわけである。彼は入学後、半年、病気休学し、私と同学年になったが、「なーに、あれは栄養失調だったのさ」と言っていた。終戦直後の学生生活は全くひどい状態だったので彼の言い分にも一理がある。

卒業後、彼は宮本正太郎先生の指導の下に太陽の分光学的研究に入った。「太陽彩層中の中性ヘリウムの励起機構」(1954)、「太陽彩層中の電離ヘリウムの励起機構」(1959)などの論文が評価され、1960年にド・ヤーヘル教授の招きでオランダのユトレヒト天文台に留学することになった。その年の3月、風の冷たい日であったが、宮本先生はじめ、私たち友人の見送りを受けて彼は神野光男氏(元 飛騨天文台)とともにフラン



写真 難波 収氏(右)と筆者。
1994年8月、IAU総会の折、オランダのハーグにて。

ス客船ベトナム号に乗り組み、神戸港からマルセイユへと旅立った。

ユトレヒトではド・ヤーヘル教授の指導の下に太陽スペクトルの研究を行った。神野氏は1年で帰国したが、彼は留学を1年延ばし、スイスのユングフラウヨッホに設置された近赤外分光器でヘリウム赤外三重線を観測し、太陽黒点を取り巻く白斑領域の物理状態を解析した。その成果はド・ヤーヘル教授との連名で1966年に公表されている。その後、ドイツのフンボルト財団の奨学金でキールのウンゼルド教授のもとに留学、星の分光研究を行っている。彼のテーマは太陽より少し高温のF8型星の定量的分光解析であった。このとき彼は家族をドイツに呼び寄せ、ヨーロッパでの家庭生活が始まる。

1964年にユトレヒト天文台に戻り、主席研究員となる。こうして1987年の停年まで天文台で主として太陽物理学の研究を進めていた。

私がユトレヒトに彼の自宅をお訪ねしたのは、私がパリに滞在していた1967年1月で、彼がユトレヒトに落ち着いた頃であった。列車がユトレヒト駅に着くとにこやかな笑顔が待っており、何を差し置いても、まず、マルコポーロ通りの彼のお宅へと向かった。奥様の丹精込めたご馳走

と、久しぶりの話に時間の経つのを忘れ、天文台のゲストルームに案内されたのは真夜中を過ぎてからであった。そのときは当時ユトレヒト天文台におられたアンダーヒル女史から輝線星について話を伺うのが私の目的であったが、そのほか、ライデン天文台やフローニンゲン大学などを訪ねることもできた。これもみな彼の計らいであった。このときのオランダ訪問と彼との交友は若き日の思い出として、いまでも私の胸に刻まれている。

1970年代には彼はハウトハーストラと共同で日食時における、光球から彩層にかけてのスペクトル線の変化に注目してその詳細な解析を行っている(1971, 1972)。また、1980年代には太陽面現象、とくに拡大する米粒班などの解析を進めるとともに、ボイジャーの資料を解析し木星表面や土星リングの構造の研究などでも成果を上げている。

こうして難波収氏は生涯をユトレヒトで過ごすことになったが、彼は日本のことを決して忘れていなかった。彼は軍学校出身であったが、戦後の日本の民主主義に深い危うさを感じていた。日本は戦争を起こした責任を取ってアジア諸国に謝罪すべきであるというのが彼の信念であった。一つには彼の住んでいたオランダが蘭領東インド(現インドネシア)の宗主国であったという歴史にも関係する。戦後のオランダには日本との戦争による排日感情が強く残っていたという背景もあった。彼は停年後、日蘭友好のために力を尽くし、また、インドネシアとも親密にかかわっている。これらに関していくつかの本の翻訳にも当たっているが、その中には「アンネ・フランク写真物語」(アンネ・フランク財団編、難波 収、岩倉務訳編、平和のアトリエ社、1992)、「日本軍強

制収用所 心の旅 レオ・ゲレインセ自伝」(難波収ほか訳、手帖社、1995)、「私は誰の子? 父を捜し求める日系二世オランダ人たち」(葉子・ハユス綿貫著、梨の木社、1995)などがある。彼はこれらの書籍出版のために奔走し、また、父を探すオランダ女性の案内役などで二、三度日本にも帰っている。最近ユトレヒトで「日本とオランダとインドネシアとの会話の会」を組織して、歴史認識を新たにし、後世に伝える仕事に取り組んでいた。この会のテーマは戦争体験、子どものトラウマ、歴史教育、家族や友人、恨みからの解放、和解、などである。彼はこの会の会報に「一士官候補生の戦後の体験」と題した一文を寄せ、自らの体験を語りながら歴史認識の重要性を訴えている。

こうして天文台を退職してからも彼には忙しい日々が待っていた。私は彼と会うたびに彼の活動とその記憶のよさに感心していたが、最近、その謎が解けた。彼は丹念なメモ主義者だったのである。彼のメモ帳を見せてもらったが、日常のデータが丹念に書き込まれている。また、今後の計画などもいろいろ書き込まれていた。長い闘病の後ではあったが突然の死はさぞかし心残りであつたらう。最後に、残された家族から彼に贈った言葉を紹介しよう。

「『いやいや、まだいろいろ書きたいことがあるんだ。読みたい本もまだたくさんあるしねえ…。いつもそう言っていた父、祖父でしたが、母国への旅を無事に終えた直後、別れを言う間もなく宇宙に旅立っていきました。さようなら、お父さん、おじいちゃん」。

古き友人の一人として私からも言いたい。さようなら難波 収君、安らかに眠りたまえ。